

ができたなかつたことだ。普通のフランス人には許容された生き方が、彼女には与えられなかつた。知人や友人たちは必死の努力にもかかわらず、皮肉なことに実体を伴わないロシアとユダヤという彼女の刻印は、彼女をフランス社会から引き離し強制収容所へと送り込んだ。友人の元にかくまわれた子供たちによつて『フランス組曲』の未完原稿は保管され、戦後随分とたつてから十年ほど前によつて出版され、大きな反響を呼び起こした。

『帝国の慰安婦』を読んで、著者の朴裕河はネミロフスキイと同様に「故郷」を喪失している人ではないか、あるいは知識人としての立場を選択した人なのではないかと感じた。彼女がこの著書の中で繰り返し指摘しているのは、慰安婦が日本軍の強制によってのみ生み出され、日本政府による徹底した謝罪と補償なしでは全く解決することはないという「挺対協」並びに現在の韓国政府の主張は、それ自体現在の韓国社会が直面する問題をはぐらかし、解決への道を閉ざすものではないかという問いかけだ。実際には、日本の植民地下の朝鮮においては、大多数の朝鮮人は殖民地政府に対して抵抗ではなく何らかの妥協をしながら生きてきた。そこでは植民地政府＝日本軍のみが権力者として存在するのではなく、数多くの朝鮮人もまたその権力構造

の一翼を担つた。慰安婦自身もすべて日本軍の強制によつて遂行されたのではなく、そこに数多くの朝鮮人商人が関与していた。ナチスの占領に比べてもはるかに長期に渡つた日本による植民地体制下においては、それを受け入れその中で自分の生活を組み立てていかなければならなかつたのが大多数の朝鮮人であつたはずだ。そしてフランス社会の様々な矛盾や課題がレジスタンスによつて解消されず、社会の底に漬のよう堆積し、それがグローバル化の浸透の中で新たなナショナリズムやテロリズムの温床となつていつたのと同様に、現代韓国社会の抱える課題は過去の日本植民地化の日本政府や日本軍の悪行や現在の日本政府の対応を糾弾するだけではいつまでも解消されない。さらにグローバル化の進展の中で生み出された現代韓国社会のはらむ大きな断層をこそ直視していくべきだと主張しているように思える。

もし彼女と同じことを日本人が主張した場合は、表面上日本の保守系の政治家やメディアが声高に叫んでいることと一見区別が難しくなつてしまふだろう。自分たちの責任を回避し、朝鮮民族に大きなダメージを与えて続けた自らの歴史に蓋をする者と受け止められかねない危険さを伴う。事実、北朝鮮による「拉致被害者」の運動が本人たちの意

多い。厳密な実証も注意深い歴史的考察もされずステレオタイプの言論が跋扈する現代のような時代には、「知識人あり方」を自分自身の基準として改めて凝視すべきではないかと思う。

(完)

#### 追記

「慰安婦問題」に関しては、日韓両国政府間で一定の合意が成立したものの、韓国国民の一部は、頑なに拒否している状況がある。朴裕河は、韓国検察に名誉毀損で在宅起訴された。

最近都内では『フランス組曲』を元にした同名の映画が封切られた。原作とは全く異なるものだが、比較の為に観てみるのも一考だ。

図するものとは異なり、日本が戦前朝鮮民族に対してしてしかした大きな加害者責任をすつかり忘却させる上で大きく貢献し、完全に保守政治家のナショナリズムの高揚に利用されている状況をみるとその主張の難しさが容易に想像できる。朴裕河が韓国において、「挺対協」や彼らに後押しされた慰安婦によつて訴訟され、日本国内の慰安婦問題の解決を目指す運動家たちによつても批判されているのは、そうした困難さを示している。

日本大使館の前に慰安婦の少女の像を建立することは、問題の解決を図るのではなくむしろ遠ざけることにしかならない。自分が属する国や集まりこそが絶対に正しいのだという考えは、恐らく心の平安をもたらすのだろう。そうではなく「故郷」を突き放すこと、そのことによつて自らの属する国や集まりから場合によつては敵視され疎外されたとしても、知識人はそうすべきだと私は思う。

2015年6月13日に法政大学で開催された日本社会文学会の30周年記念大会で朴裕河の講演を聞いた。その時の彼女は、決して先入観や多数意見をそのまま受け入れず、絶えず批判精神を持つて物事を見極めようとする強靭的なやかな精神の持ち主のようと思えた。朴裕河とイレーヌ・ネミロフスキイという二人の優れた知識人に学ぶ事は